第二十四回ことばの祭典―短歌・俳句・川柳へのいざない―　入賞作品

【事前応募】　題　「海」もしくは「潮」

《短歌の部》

ことばの祭典賞

心は帆かなしく広がる海原のことば受け止めようと生きれば　　藤田恵里奈（群馬県伊勢崎市）

［講評］初句切れで強調した「心は帆」が大胆でいい。「かなしく」は「愛しく」「哀しく」の両方だろう。海の心と言葉を全力で受けとめようとする切実さが心に残る。（伊藤）

「海原のことば」とは、波の音。そして、波に消えた死者たちの声。白い帆が、震えながら、揺れながら、ときにいっぱいに膨らみながら、それらを受け止めようとしてきた歳月を思う。（梶原）

伊藤一彦選

特選

海幸彦の悪役いっつも兄の役言い出しっぺは弟なのに　　甲斐智朗（宮崎県西臼杵郡高千穂町）

［講評］海幸山幸の神話を踏まえての歌。「海」が悪役にされることへの抗議が鋭い。津波を引きおこすもとも海ではなく陸地なのだ。

秀逸

海底（うなぞこ）を竜宮城と思いたし十年経ちても帰れぬならば　　後藤善之（宮城県気仙沼市）

［講評］津波にさらわれた人たちの幸福を願わずにいられない気持がうんだ秀作である。

十年目の朝の光の凪の海忘れられない顔隠し持つ　　加藤鈴枝（仙台市青葉区）

［講評］目の前の静かな海からは想像もつかない十年前の津波の海。結句が端的で、深い。

佳作

生ならず死をも奪いし震災の海を十年潜る潜水士　　横溝麻志穂（仙台市青葉区・高校２年）

［講評］「死をも奪いし」の鋭い表現にはっとさせられた。下句も具体的でいい。

漁師への夢一途なる十五の児（こ）ひとり海辺の高校へ発つ　　木村一枝（仙台市泉区）

［講評］漁師への夢に挑戦する若い人に対する激励と愛情が強く伝わってくる。

そこはもう海の彼方と呼ぶなかれ松山英樹マスターズⅤ　　杉山太郎（神奈川県横浜市）

［講評］今回の応募の中の異色作で、新鮮な発想が面白い。言葉に鋭い作者だ。

暗闇にひとりぼっちで４億年シーラカンスはコロナを知らぬ　　遠藤優音（東京都武蔵野市）

［講評］シーラカンスは幸福なのか、不幸なのか、そう問いかける作者の心に「現代」がある。

二秒だけ遠くに見えた海のことふたりの目配せだけが知ってる　　小宮瑠華（仙台市青葉区・高校１年）

［講評］恋する心だけが発見した海。下の句の「目配せ」が絶妙で、みずみずしい。

梶原さい子選

特選

漁師への夢一途なる十五の児（こ）ひとり海辺の高校へ発つ　　木村一枝（仙台市泉区）

［講評］送られる側、送り出す側、どちらにも覚悟があろう。「一途」と「ひとり」の響き合う、力強く、また、せつない歌。

秀逸

若き吾に「美（うつく）しいしょ」と指しし青　義母の故郷女川の海　　林静江（仙台市若林区）

［講評］方言の「美（うつく）しいしょ」から誇らしさがこぼれる。義母は、「吾」にこそ、その海の美しさを伝えたかった。

二秒だけ遠くに見えた海のことふたりの目配せだけが知ってる　　小宮瑠華（仙台市青葉区・高校1年）

［講評］周囲にはまだ秘密の恋か。「二秒だけ」という限定ゆえに、その海の思い出が、よりかけがえのないものに思われてくる。

佳作

そこはもう海の彼方と呼ぶなかれ松山英樹マスターズV　　杉山太郎（神奈川県横浜市）

［講評］「そこ」とは、とても辿り着けないと思っていた夢の場所。松山は自分の力で彼方の岸を引き寄せた。

夕空に春のとんびの同心円この海に嗚呼七百余人　　丸山みづほ（仙台市太白区）

［講評］「七百余人」とは海で亡くなった方、または、行方不明者の数だろうか。とんびが、彼らのやり方で、死者たちを悼んでいるように思える。

海沿いのケアハウス出て散歩する老母の二歩に合わせる一歩　　阿部文彦（神奈川県横須賀市）

［講評］母の小さな歩幅に合わせる優しさが嬉しい。「海沿い」という設定が、さわやかさをもたらしている。

光呑み音呑み火呑み燃えかすの花火を呑んでなお暗い海　　尾内甲太郎（静岡県浜松市）

［講評］花火が開き、暗闇に戻るまでの流れが、丁寧に、畳みかけるように示されている。「なお」が効いている。

銀婚の夫婦となってみたもののはてさていかに　ならび海みる　　関本歌子（仙台市泉区）

［講評］どこまでも自然体の二人。特別なことをしなくても、ただ、ならんで海を見ている姿こそ、すてきです。

《俳句の部》

ことばの祭典賞

三月の海が溢れる仏壇に　　鎌田京子（仙台市泉区）

［講評］「三月の海」は東日本大震災時の海、そして10年後の海。仏壇の前に座す作者。あの日の黒い壁となった津波が仏壇から溢れ襲い掛かる。シュールな心象風景は、「仏壇」という具体性に支えられて、津波の飛沫を実感させ、恐怖と哀しみの中へ、強烈に読者を巻き込む。（寺井）

津波犠牲者を弔った仏壇の背後に横たわる海。津波を生んだ恐ろしい海だが、無限の恵みをもたらす豊穣の海でもある。その海が十年後の三月十一日に祈りの波となって仏壇から溢れる。鮮烈。（高野）

寺井谷子選

特選

おい待てよおい待てよ海声嗄らす　　中山喜博（香川県綾歌郡宇多津町）

［講評］声を嗄らしながら叫ぶ。「おい待てよ」は襲い掛かる津波へか、何もかも攫ってゆく沖へか。迫りくる力、連れ去る力、最大限とも思える海の力への甲斐無き絶叫に、唯々息を呑む。

秀逸

春の海ひねもす処理後の水流す　　馬場和義（大阪府吹田市）

［講評］「春の海」加えて「ひねもす」となれば、と思わせつつ後半の景は原発事故の未だどうしようも無い対処の様を書く。「春の海」の憂鬱と鬱屈。

被災地は海底にあり裸の子　　三浦芳子（宮城県柴田郡大河原町）

［講評］それぞれの被災に抗しながら、防潮堤が築かれ、海から遠く家々が建っていく。気付くと真の「被災地」は海底に存在するのではないか。その海底に遊ぶ裸の子等の笑い声。

佳作

海見えて陸奥一之宮花の中　　佐野享保（宮城県大崎市）

［講評］桜満開の陸奥一之宮。その彼方に見える海も嘗てと変わらぬ。変わらぬからこそ尚、切ない。

潮風やむずむず生えてくる背鰭　　安藤敏彦（福島県郡山市）

［講評］どのような無体な悲劇が襲おうとも、海への飛翔を誘うものは潮風に抱かれた産土の力。

夏海にうつりし月を食らふ魚（うお）　　大橋季実果（宮城県遠田郡美里町・高校２年）

［講評］この魚は、海底から月を恋うて来たのであろう。海面にうつる大きな夏の月。一飲みの気息に人への転生を思う。

心より深い海などなく春愁　　岡田とみ子（宮城県宮城郡松島町）

［講評］何もかも飲み込む海の深さ。しかし、今の作者の心の深さには届くまい。言葉にならぬ深い想いの海を抱えながら、又春が過ぎる。

献血に海の匂いの腕を出す　　六月朔日光（福岡県福岡市）

［講評］黒く逞しい腕。そこに沁み着いた「海の匂い」。それは海と共に生きる選択をした寡黙な男の腕である。

高野ムツオ選

特選

春潮や戻れぬ牛の耳に札　　水野大雅（愛知県名古屋市）

［講評］福島第一原発事故の放射能禍のため置き去りにされた牧牛。野生となって飢えと闘い生きるしかない。その牛の耳に今もまだ人間に飼われた証の札が付いたままになっていることが何とも悲しい。春の潮が慈しむように牛を抱きしめる。

秀逸

春の海ひねもす処理後の水流す　　馬場和義（大阪府吹田市）

［講評］原発事故後に増え続ける汚染水。処理したといえど汚染水である。まもなく海洋放出。世界的にはこれまでも放出されてきたというが、人間は海をあらゆる面から汚す一方だ。〈春の海ひねもすのたりのたりかな　蕪村〉を踏まえた諧謔味が横溢。

心より深い海などなく春愁　　岡田とみ子（宮城県宮城郡松島町）

［講評］「春愁」は春の物憂い気分のことだが、女性の人恋う思いがそのベースにある。その心より深いものはこの世に存在しないという指摘は説得力十分。深海が心の広さ、深さをイメージさせるところも魅力的。

佳作

潮風やむずむず生えてくる背鰭　　安藤敏彦（福島県郡山市）

［講評］無季だが、夏の潮風の印象が十分伝わる。背鰭が生えるという発想は他にもあるかもしれないが「むずむず」が実感を伝える。

震災忌海の青さも十年分　　横溝麻志穂（仙台市青葉区・高校２年）

［講評］震災忌が関東大震災を指すのは一般的だが、「海の青さ」「十年」が東日本大震災であることを十分伝える。海の色にも十年の歳月がこもる。

てんでんこ復習ふ海辺の新学期　　菊池節子（岩手県盛岡市）

［講評］「てんでんこ」は三陸地方に伝わる言い伝え。自分の命は自分で守れという意味。津波という厳しい自然と向かい合って生きるための非情とも思える不文律。それを新学期になると浜の小学校では何度も繰り返し教える。

夏の波恋心より揺れている　　鄭為熠（東京都葛飾区・高校３年）

［講評］夏の土用波のうねりだろう。沖で生まれ、膨れ目前で砕け散る。それを何度も繰り返す。抱き始めた恋心は、まだそこまで大胆にはなれない。ナイーヴな感覚。

夏潮の深く染み入るタオルかな　　水野結雅（愛知県名古屋市・中学２年）

［講評］海水浴などの折、たまたま濡らしたタオルと解したい。その重みは夏の黒潮の重みがのりうつったもの。一夏の思い出の重さでもある。

《川柳の部》

ことばの祭典賞

君はまだ海辺に立ったままでいる　星出冬馬（島根県大田市）

［講評］震災から十年、この句の君を想像すると、涙が溢れてきます。海辺の風景もあの日のままなのです。（小島）

海辺に身動きもせず佇む人。語るでも叫ぶでもなく何も語らない姿に、痛々しさを思う。作品も饒舌でない方がイメージが広がり、余韻余情を醸成する。（雫石）

小島蘭幸選

特選

海へ帰すと流線形になる鰯　木下草風（岡山県岡山市）

［講評］今にも泳ぎ出しそうな流線形。私たちは大切な海の恵みをいただいているのです。この句「鰯」の措辞が見事です。

秀逸

鎖骨に溜る悔し涙と海鳴りと　北れい子（宮城県白石市）

［講評］「悔し涙と海鳴り」から、あの日の映像が迫ってきます。永久に忘れることはないのです。

またひとり離島を決めた春の潮　勝又明城（宮城県石巻市）

［講評］春は旅立ちの季節です。大きな夢を抱いて都会へ出発する青年にエールを‼

佳作

海があるだから地球は生きている　廣瀬凛音（仙台市泉区・小学６年）

［講評］海、自然を大切にという思いがしみじみと伝わってきます。かけがいのない地球です。

大海原耳を澄まして目を閉じて　谷井れい子（宮城県気仙沼市）

［講評］耳を澄ますと父の声が聞こえてきます。目を閉じると母の笑顔が浮かんできます。大好きな海です。

金槌は内緒なんです海が好き　渡辺徹（仙台市青葉区）

［講評］美しい海を見ながら「私泳げないんです」なんて言えないですよね。可愛い内緒です。

記念日はオーシャンビューの部屋にする　吉村敦（仙台市泉区）

［講評］海の見えるホテル、いいですね。コロナが収束したら、私も行きたいな。

愛言葉いたずら波がかき消した　吉田和菜（宮城県気仙沼市・高校２年）

［講評］砂に書いたラブレター、熱い思いはきっと伝わります。

雫石隆子選

特選

黒板が太平洋に見えてくる　　門脇かずお（鳥取県米子市）

［講評］黒板は教室の中心。子どもらの探求心、好奇心も無限である。果てしなく広い海に漕ぎ出そうとする若さ、前向きな子らが居て日本の未来がある。

秀逸

三月の凪は言い訳めいてくる　　安藤敏彦（福島県郡山市）

［講評］三月は東日本大震災に遭ってから、特別の月になった。「言い訳めく」の直喩が凪の海への告発である。被災地は、あの日をまだまだ忘れられない。

汚染水汚染水海首竦む　　中山喜博（香川県綾歌郡宇多津町）

［講評］竦むの動詞一つに、実字ばかりの作品。視覚的に強烈な印象だが、個が際立っている。活喩法の海が生々しい。

佳作

生きるってひねもす男波のたる如　　菅野實（仙台市青葉区）

［講評］舌に転がすとどこか引っ掛かりのあるような作品ではあるが、魅力がある。人生はざんぶりと波を被り、這いずりまわるようなもの、ということであろう。

海原の診断結果要介護　　上田由美子（宮城県宮城郡松島町）

［講評］プラごみが漂い、原発の汚染水も放流されると云う海。「介護」というリアルな社会現象のワードを使い、緊急性をうったえている。

ねえ海よ人は強いよ言葉持つ　　飯田ふく江（宮城県岩沼市）

［講評］会話体の作品であり、海は身近で心許せる大自然。人は小さい存在だが、言葉と云う強みを持っている。

海があるだから地球は生きている　　廣瀬凛音（仙台市泉区・小学６年）

［講評］海は生命の源。潮の干満、日々変化する海こそ、生きもののようでもある。海があるかぎり人も生きていける。

この雑魚も大海泳いできた勇者　　瀬戸睦子（宮城県黒川郡大衡村）

［講評］雑魚だって勇者、暖かい作品である。ヒーローだけが勇者ではなく、必死に生きて全てに眼差しを向けた作品。

佐伯一麦館長賞

《短歌の部》

漕ぎ出そう言葉集めの船旅へページをめくり活字の海へ　　山内由樹（仙台市青葉区）

［講評］お題の「海」を、現実の海ではなく、活字の海として捉えた視点が新鮮でした。大いなる言葉の海原へ漕ぎ出していく溌剌さがあり、言葉は恵みとしての魚でもある。文学館への励ましも感じられるようで、うれしく読みました。

《俳句の部》

大海を知らぬ蛙が大欠伸　　髙橋基（千葉県柏市）

［講評］「井の中の蛙大海を知らず」ということわざから発想を得て、海という大きな存在と、それとはあまり関係のない小さな生命である蛙とをかけ合わせた妙。そして、何より、お題を知ってか知らずか、という面持ちでの蛙の大欠伸、という諧謔味に惹かれました。

《川柳の部》

赤潮や爺の自転車ギーコギコ　　黒河内玉枝（宮城県名取市）

［講評］韻を踏んだリズムがよく、潮気により錆びついた自転車がたてる音が聞こえてきます。赤潮という深刻な被害の状況の中、飄々として自転車を漕ぐ爺さんの姿も浮かんで来るようで、短篇小説の一情景として世界が広がる趣がありました。